

第九章

付随的な調査：人工、秘密言語

中世後期、ルネサンスの哲学には様々な種類の秘密の言語に対する強い興味が含まれる。これらは様々に秘密を隠匿する、秘術的なものを表す、文章を短く写し換える、異言語間で伝達する、人間の知識を表した百科辞典的な記憶術を目的としたものである。これら付随的調査の章を通して言えることだが、私は興味ある読者が入手できる資料から最小限紹介することしかできない。

9.1 省略文字：速記の歴史

古代ギリシャ語には紀元前1世紀に Marcus Tullius Tiro による Tironian Hand または (Tilonian) Notation と呼ばれる省略が使われていた。(Rose 1874, Allen 1889, Boge 1973 を見よ。) 第五章で見てきたように、Newbold は初期ギリシャ語省略を彼の解読法に使うことを試み、後のローマ時代、中世の多くの省略はこの初期ギリシャ語の方法に基づいていた。図 38 はギリシャ語の方法に由来する中世の興味深い例を示したものである。字画 (stroke) は "a" から "k" までの文字と、初期のインド-アラビア数字から作られている。この方法はその作者である 13 世紀の英国の修道士によって "Notaria Aristotelis" と呼ばれ、ヴォイニッチの記号ともいくつかの類似があることでも興味がある。(私の意見ではどちらの起源もおそらく初期数字からだと思う。) これらの記号は点、線などを元に、単語を作るために加えられる。Johnen (1940, p. 34) の報告によると、Roger Bacon は "ars notatoria" と呼ばれる Tironian Notation を知っていた。

Cappelli (1949) は古代から中世までのラテン語省略の歴史とその発展について概略を記している。ローマ字の体系ではいくつかの方法を使用していた。1文字で全単語や音節を表せた。単語も切り取ったり短縮することができ、普通何か(上下へ伸びる尾や渦巻図形、ある文字の上の直線、曲線、斜線等。) が省略されていることを示す記号が付けられた。図 17 はいくつかのヴォイニッチの記号と似た、中世に使われたラテン語の省略である。略記の歴史とその初期の体系を扱った作品には Giulietti (1968), Johnen (1940) があり、Alston (1966) はこの主題に関する出版目録を与えてくれる。

私が調査した最も初期のヨーロッパまたは英語の略記法は単純な線や曲線を中心に、それに点、ダッシュ、丸、ホック等を様々な位置に加え、複雑な記号を作り全単語を表すことになる。ほとんどのこれら初期の体系は「音声上」のものではなかった。言い換えれば、それらは現代のものと同じく単語の音を個々に綴り、音を示すものではない。実際初期の方法は、アルファベットの要素は含まれているものの、表意文字や概念を記号的に表すほうが大きかった。全ての体系はきわめて精巧で、膨大な任意の記号の配置を記憶することが必要であり、正確かつ早く記すことは困難であった。現代の読者にはただただ、どのようにしてそれら膨大な規則や形を覚え、書いたものを後に読み返す際に小さな点やホックを正確に暗記し見分けるよう訓練したか不思議である。これらの方法は通常の筆記法より

多くの努力を要したと考えられる。

Duthie (1970)はエリザベス朝時代の興味深い現存する主な3つの体系を比較している。少なくともそのうちの一つはシェークスピアの戯曲の中で使われた記録があり、間違いなくある程度用いられていた。私は以下に Duthie が紹介した高度に省略された形を要約する。これら3つの体系は16世紀、17世紀初期に利用できた典型的な方法である。それらの作者はそれらを実際に、単に現代の方法で行われるスピーチの写し換えだけでなく、短縮した速記として、または隠匿や上品な哲学的「概念」を表す方法としても用いた。

9.1.1 Characterie (Thomas Bright, 1588 年頃)

図 38 は Bright の体系で基本字画に補助の要素を加えたものである。それぞれ18の基本要素は縦線の一番上のホックや渦巻等からなる。これらの記号は4つの異なる位置に書かれる。(垂直、水平、左斜め、右斜め。)加えて基本記号の一番下には12個の中から一つの曲線が加えられ、普通の単語を表すために864個の記号が組み合わせられる。これらは"characterall words"と呼ばれる。この基本リストにない他の単語はそれらと同義語、反義語として"characterall word"に組み合わせられることで表現される。そして実際の単語の基本記号の第一字目に接頭することで、限定辞としての役割を持つ。(図 38 の例を見よ。)Duthie が記述するように、この体系は原始的で、扱いにくく、使用者に多大な暗記のための労力をかけ、誤ったそして混乱する形を容易に作り出す。

9.1.2 Brachygraphie (Peter Bales, 1590 年頃)

Bales の体系は通常のアローマ字を点、カンマ、アクセント (Bales はまとめて「点画」と呼んだ。)と組み合わせて使い、それは混乱を避けるため文字の周りに注意深く、正確に置かれた。この文字と「点画」の組み合わせは Bright の体系にあるような一般の基本的単語リストを作り、そして同義語、反義語は基本単語の記号の右や左に字画を追加して示された。この略記方法は500個以上の異なる記号を覚えることが要求される。誤りを避けるため「点画」は高い精度を持って書かれることが必要である。これが Bright の体系より実際的なものであったとは思われない。

9.1.3 Stenographie (John Willis, 1602 年)

Duthie は Stenographie が3つの中で最も優れていて、しかも近代の略記の基礎となったと考えた。図 38 は「不変接辞」と呼ばれる26個の基本字画である。これらは部分的に音を表し、「無音」の文字は書かれる単語の中にはほとんどない。「h」の音価で表される字画の一番下に加わる丸や点は、母音を表す基本字画の周りに5つ時計回りに配置される。単語の省略形はいくらか現代の方法と似ていて、これら要素を組み合わせで作られる。Willis の体系は実際、とても良く後の Pittman の体系 (これに由来している可能性は十分にある。)に似ている。Duthie は Stenographie が、速い逐語的なものではなく、ゆっくりとした丁寧なスピーチを短縮して記録するために用いられたと考えた。興味深いことに

Willis は彼の体系を Stenographie と同じくらい"Steganographie"と呼び、それが秘密を隠匿するのに適したものだと考えていた。

要約すると、これら体系やその他これらに関連するものが、ヴォイニッチの記号に良く似ているとは思えない。ヴォイニッチの記号と唯一類似の見られる初期の略記法の点、ダッシュ、ホック、そして「点画」では「二重の c」記号"œ"の上にホックや渦巻が現れる"œ"だけである。これは繰り返し現れる基本記号に補助の印を加えてできた構造には見えない。私の意見では、このヴォイニッチの記号と、中世のラテン語省略との類似は初期の数字の形から説明した方が納得いくものだと思う。(セクション 4.1.2、図 16, 17 を見よ。)

9.2 速記：初期暗号の歴史

古代エジプトやローマには暗号の記録が存在する。新しく作られたアルファベットや幾何学記号を用いた様々な置換暗号は中世初期には知られていた。Roger Bacon は秘密の文章に大きな興味を持ち、この主題に関する彼の作品 *Epistola de Secretis Operibus Artis et Naturae* の中の主題は (ヴォイニッチ手稿の解読者によって) 多くが Bacon の主張と理解されていた。彼は以下のような手法を用いて重大な秘密を隠すことを勧め、同時に一般庶民による濫用を防いだ。(1) 文字や詩 (または「呪文」)。(2) 寓話や謎。(3) ある文字、特に母音を省略。(ヘブライ、カルデア、アラブ人達が秘密を読まれ難くするために行う。)(4) 異なる種類の文字を混ぜる。(例えば天文学者の Ethicus は彼の知識を隠すためヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語を混ぜ合わせた。)(5) 自分に身近でない文字を用いる。(6) 想像で文字を作り上げる。(Bacon によると、Artepheus の書 *Book of the Secrets of Nature* で用いられている方法が特に良い方法である。)(7) アルファベット文字を用いる代わりに幾何学図形に点や記号を組み合わせたものを用いる。(8) そして最後に Bacon が全ての中で最も優れた方法であると考えた「notory art」。それは「誰もが望むくらい簡単で、素早い」筆記術である。Bacon は少なくともこれらのうちのいくつかの方法を彼の著作の中で用いた。

とても興味深くそして不思議博士(Bacon)の信頼できる記述からの初期暗号法の完全な概略は、ヴォイニッチ手稿の研究者達にこれらの技術がヴォイニッチのページの中で使われていないか探させたし、それを Bacon の勧めた方法を実行した結果だと考えさせることになった。Bacon のものとされる錬金術作品の中にはかなりの暗号を扱う記述が存在する。(Hime 1904, 1914, 1915; Steele 1928a, 1928b; Manly 1931) Bacon が火薬の製法を隠したとされるアナグラムは様々に解釈されたが、しかし嘘は暴かれた。(それは迷信か初期の写本の文章を編集した人の不注意な間違いと退けられた。)

様々な暗号法が他の初期の作家達によって記述されている。Ramon Lull (Yates 1960, Rossi 1961), Trithemius (1564, 1606), Porta (1563), Agrippa (1970), Athanasius Kircher (Kircher 1631, McCracken 1948)の体系は暗号に必須の形とされ、それなりに使われてきた。Deacon (1968)によると John Dee は暗号術に非常に興味を持ち、彼の保護者エリザベス女王の任務でそれを使った。多くの初期体系は置換暗号であり、その雑多な複合物の中には転置、奇妙な記号、幾何学図形、数字、錬金術・占星術記号、ラテン語省略等が使われた。それに加えて、更に洗練された技術も使われていた。ごく普通の単語表があり、それは暗号単語

の文字に変換するのに使うために、決められた文字で始まっていた。ラテン語 5 単語からなるつまらない文章は、秘密のメッセージを表す隠された 5 文字の単語となる。通信者はそれぞれに「コードブック」のコピーを持ち、それには被覆単語の長い表が書かれている。(でたらめの単語、天使や悪魔の名前、宗教上の決まり文句等。)それらは文字の中に短いメッセージを効果的に隠すために使われる。(例えば Trithemius 1564, pp. 48ff.を見よ。) Ramon Lull の回転する幾何学図は文字が記されており、二重字(Aa, Ab, Ac, ..., Az, Ba, Bb, etc.) を作るために用いられ、それらは単語や概念を表すために使われる。いくつかの初期暗号体系は暗号環を採用しており、一つは固定され、一つは回転するアルファベットである。(例えば 15 世紀 Alberti、16 世紀 Silvester and Porta がある。Silvester 1526, p. 7; Porta 1563, pp. 73, 79, 83; Meister 1902, 1906 を見よ。)

十分長い「ダミー」の文章の中に秘密のメッセージを隠す初期の暗号術は、いくらかの通信者たちの間で使われていた。錬金術の論文は最高の謎が期待され、この方法で隠れた短いメッセージを伝える理想の手段であった。2, 3 文字を様々な組み合わせで用いたり、いくつかの装飾や偶然の特徴の存在・非存在を使う似たような隠匿方法。(小文字大文字、小さな点、下線、ある文字には加わり他には加わらない字画、影等。)これらの組み合わせはメッセージの文字を様々な方法で表すために用いられた。例えば 1500 年頃 Trithemius (A.D. 1462-1516)による三重字法であり、AAA, AAB, AAC, ABA, ABB, ABC, ..., CCA, CCB, CCC の組み合わせはアルファベット文字や 2, 3 のさらなる記号に 27 の値を与えた。この 27 の区分はさらに抽象的な独特の組み合わせを持つ 3 つのものからなる 3 つの状態で表された。(3 つの異なるフォント、印刷物の濃淡段階等。)有名な Francis Bacon の暗号はこのタイプであり、Trithemius の体系とは単に 5 つの要素を使うという点で異なっているだけで、2 つの区別できるものまたは選択を作り、そして被覆文章の中にさらに洗練された隠匿のためにその区別を使う方法である。

初期のローマ教皇とイタリア宮廷では軍事目的で様々な暗号方法を使い、それらは驚くほどの複雑さを持ち洗練されたものであった。これらの体系の多くは Meister (1902, 1906), Pasini (1873), Sacco (1947), Alberti (1568)に記載されている。Meister (1902)はイタリアの暗号の詳細な歴史を紹介し、そこでの最も早い年代は 1226 年ヴェネチアからのものであり、他のイタリアの都市からの暗号は 14, 15 世紀のものである。Meister (1906)は「用語集」と呼ばれた教会や国の通信で一般に用いられた単語や句(「教皇」、「馬」、「戦士」、名譽を称える決まり文句、地名、称号等。)を表す暗号の単語や句が書かれた小さな表の最も早い年代を 1326 年または 1327 年とした。Meister は 14, 15 世紀教皇の通信に使われた多くの注目すべき複雑で、進んだ体系について記述している。これらは様々な置換要素を使い、(多くの変化する暗号要素全てが同じ平文の要素を表す。)しばしば奇異で、外国のもしくは人工アルファベットで記される。このような体系の多くは「無意味な文字」が使用される。(いくつかのダミーの記号リストがあり、それ自体では意味がないものの、規則を隠し、おまけに解読者を混乱させる目的で文章中に埋められる。)これら全てのもは一緒に使われる。「用語集」は少数の基本的な暗号であり、これに無意味な文字の組み合わせと共に一重、二重、三重の異字体系が加わる。図 39 はいくつかの初期イタリア暗号体系の例を示したものである。

Jakob Silvester (1526)によって記述される体系が、その初期の年代という点でとりわけ

興味がある。この体系はラテン語の辞書に基づいている。暗号はローマ数字から作られ、それらは辞書のそれぞれのページの単語が割り当てられている。解読者を混乱させるために、二文字のてたらしめな順番の選択肢 (AF, DC, BN 等) が段落を指定するローマ数字の代わりに、またはローマ数字に混ぜられて使われる。それぞれの段落の中には個々の単語が、およそアルファベット順に並べられ、それらはアラビア数字によって指定される。ラテン語の最後は一字、または二文字で示される。アルファベットは人工、または外国の記号が様々に用いられる。無意味な文字は全文章中に様々な組み合わせで挿入される。図 40 は Silvester の体系の主な特徴の概略であり、それに加えてそれを使って暗号化した 2 つの短い文章の例である。しかし残念なことに、Silvester の書からは辞書やヴォイニッチの文章に見られる現象との関連を完全に調査するための体系やその他の観点に関する十分な詳細を知ることにはできないし、統計的に研究するための暗号化された十分な長さのテキストは得られない。

Tiltman が注目したヴォイニッチ文章中の「初め-中-終わり」構造を覚えている読者は、この初期の暗号体系が彼らが考えた現象を説明する可能性があると考えられるかもしれない。(セクション 5.6.5, 6.6, 9.3 そして巻末も見よ。) Friedman と Tiltman は人工言語の歴史をヴォイニッチ手稿と同じくらい早い年代(1550 年以前)まで遡る精力的な試みを行った。私の意見ではそのような早い時代での言語は 2 つの分野で見つけることができる。第一に初期の暗号体系の中。第二に中世・ルネサンスの暗記術。Yates (1966, p. 378) は Francis Bacon, Comenius, Bisterfeld, Dalgarno, Wilkins の作品が「真の文字」の発展へ向けられていることを記述した。(すなわち漢字体系のように「直接」表意文字、象形文字に関して参照され、そして綴りや単語の音と独立している。) 彼女は Rossi (1960) を引用しながら初期の記憶術の成立をたどる試みを行った。Jakob Silvester のような複雑な暗号体系がヴォイニッチの文章の基礎となったことは十分に考えられる。興味深いことを記しておけば、Silvester の作品が大英博物館にあり、それには 1616 年に John Dee によってサインが書かれているので、彼がそれを所有していたと考えられる。(Shulman 1976, p. 2)

9.3 Pasigraphy : 普及及び人工言語

中世後期からルネサンス初期にかけてラテン語はもはや学者達の間での共通語としての機能を果たさなくなり、次第に日常語が使われるようになった。多くの学者達はそれにとって代わる普遍言語を見つけようとしていた。同時期旅行者、または商人、宣教師達は単語の音をアルファベットで表すのではなく、遙か東で使われている表意文字という概念全体を表す文字のことを知るようになった。このことがいくつかの方法で日常語の多様性を回避し、全ての国で同じように概念を直接表す「普遍文字」、「真の文字」を作り出す努力を生むことになった。

この試みは真に新しいものではなかった。事実それは中世の百科辞典的暗記術に基づいていた。Yates (1966) はこの普遍言語との関わりから Francis Bacon や他の 17 世紀の作品を調べた。Yates が示したように、Leibnitz は記憶術の高まりから極限算術 (微積分学) までの古き伝統の最後の偉大な具現者である。(Yates 1966, pp. 378 ff.)

初期の人工言語は暗号記号と多くの点で共通していた。土台として単語や概念を「syncategoremata」と呼ばれる枠組みを作り分類する計画であった。単語の分類はそれぞれの著者が彼自身の哲学的傾向や目的によって選んだ。そしてどんなある特定の言語からも独立していることが期待され、その枠組みには数字や符号がラテン語の辞書単語に割り当てられた。分類のいくつかは具体的かつ明白なものだが、他の多くは現代の読者にとってひどく難解で哲学的なものである。スペインの匿名のイエズス会師によって 1653 年に考案された「arithmeticus nomenclator」と呼ばれる体系では、分類は「要素」に関連する全ての単語に用意された。この分類はローマ数字の I が割り当てられた。アラビア数字は個々の単語の中の分類を選択するために使われた。例えば 1. Fire, 2. Flame, 3. Smoke,..., 6. Wind, 7. Breeze,..., 12. Water, etc., (Groves 1846, p. 55 ff.を見よ。) Dalgarno の体系には 20 の単語や概念の分類があり、それらは大文字で表される。A. は例えば分類"Ens, Res"; H は"Spiritus", U は"Homo"等を表した。(Dalgarno, 1661)

John Wilkins は 1668 年頃「真の文字」体系を発明し、次のような 40 の分類を作り上げた。1. "Transcendental, General"; 2. "Transcendental, Mixed";..., 5. "God, the Creator"; 6. "The World, Creation"; 7. "The Elements"; etc.これらの哲学的分類は当時一般的であった宇宙の性質についての概念を具体的に表すものであり、中世に作られた物が基礎となっている。このような分類にはさらに下位区分があり、"differences"と"species"がある。"Differences"の方はその分類の基本記号の左に垂直や斜めの線が付加され、"species"の方は付加記号がその右に付加され示される。一般的な情報（例えば終わり等）は複雑な記号に点や線が付加されて示される。Wilkins の体系は書かれるだけでなく、同じくらい話される方でも使われた。

Groves (1846)と Kircher (1663)はいくつかの初期人工言語体系を短く紹介をしている。Bausani (1970)は全ての型の人工言語（これには宗教、暗号、神秘言語が含まれる。）を完全に扱っている。Dalgarno の体系は Dalgarno (1661)、Comenius の Geissler (1959)の中で記される。他の体系については Wilkins (1641, 1668a, 1668b)、Top (1603)で紹介されている。これらの人工言語はいくつかの理由でヴォイニッチ手稿研究者達に興味を持たれている。第一に手稿研究に何年もの間献身的に取り組んだ二人の暗号学者、Friedman と Tiltman はお互い、独自にヴォイニッチの文章はこの型の人工言語で書かれているとの仮説にたどり着いた。第二に初期普遍言語の構造（分類の基本に、一つもしくはそれ以上の"species"や独立した単語が選ばれ続く。そして最後には文法形を表す。）は Tiltman がヴォイニッチの文章中の単語で見つけた「初め-中-終わり」構造と良く一致する。最後に前の段落で見てきたように、教皇側が使っていた初期の暗号方法は手稿のものにととてもよく似ているし、年代的にも手稿が書かれた年代と同じくらい早く、条件は十分満たしている。

9.4 魔術、宗教上の言語、アルファベット

おそらくヴォイニッチ手稿の問題と関係がある、もう一つの大きな人工言語グループについての議論が残されている。この小見出しで私は多くの種類の秘密、神秘言語をまとめて扱う。錬金術、哲学体系。神、天使、悪魔から啓示を得たり、通信することを目的とし

た言語。魔術の儀式、祈り、呪文で使われた記号体系。Bausani (1970)では普遍言語および、精神分裂患者やその他の精神障害、一時的な精神不安定下(例えば神秘的な恍惚、靈感を受けた状態。)での造語症("glossolalia")を含むこれら全ての人工言語の優れた概略を読む。Gessmann (1922)は中世の錬金術師、医師、占星術師が使った単語や記号の膨大なリストを作っている。

9.4.1 魔術言語

すでにセクション 8.4 で少しだけ魔術記号や魔術体系の筆記については議論してきた。ほとんどの体系には護符、紋章、図、たくさんの奇妙な文字で飾られた道具(短剣、剣、燭台等)が含まれる。De Givry (1971)と Seligman (1948)は多くの魔術図を様々な年代の幅広い資料から引用している。多くのアルファベットは多少誤って伝わったヘブライ文字に基づいている。Mathers (1974, pl. XV)はこれらいくつかのヘブライ筆記体系を示している。("Alphabet of the Magi," "Celestial Writing," "Malachim" or "Writing of the Angels," and "Passing of the River") いくつかの *Picatrix* 中のアルファベットは"Indian"と呼ばれ、デーヴァナーガリー(訳注: サンスクリットアルファベット)や他のインド筆記体系が歪曲されたものであろう。他にも *Picatrix* には、はっきりと初期のアラビア文字、エジプト象形文字、神官文字に似たものがある。エジプト単語はヘルメス文書中の単語に見つかる。(Festugière 1944-54) (例えば「true names of Hermes Trismegistus」の中の「osergariach」は「strong is the Ka (魂) of Re (レー)」という単語「wsr ka re」を含む。) *Picatrix* にもまた「星図」筆記が使われ、セクション 3.3.3 や 8.4 で述べたように、円が線や曲線に連なり作られる。興味深いことを記しておけば、神秘ヘブライアルファベット「Writing of the Angels」と「Passing of the River」もまた小さな円が線状に並んで作られる。図 41 は様々な資料からいくつかの魔術アルファベットを示したものである。

以上議論してきた興味深い魔術記号は一つの例外を除き、ヴォイニッチのどんな記号や図とも直接的類似関係はないように思われる。*Picatrix* の「星図」、いくつかのヘブライアルファベット、ある錬金術記号は全て f67v2 の 4 つのかどにある顔で装飾された奇妙な幾何学記号ととてもよく似ている。そしてまた Brumbaugh が「clock face」と考えた小さな図形は *Picatrix* の呪文やその他、上で述べてきた筆記体系で共通に見られる記号"i"を含んでいるのかもしれない。

9.4.2 錬金術、医術、占星術アルファベット

Gessmann (1922)は中世の錬金術師、学者、哲学者が用いた記号や符号単語を膨大に集め示している。図 42 はこれらの一般的な様子や性質を示すのに足る、そしてまたヴォイニッチの記号に似た外見を持つものを選んで示した。錬金術師達によって広く使われていたこれら記号は、ラテン語の文章の中に混ぜられた錬金術の過程や生成物を示す秘密の速記記号である。これらの記号のうちいくらかはヴォイニッチのものに似ているものもあるが、そのほとんどは似ていないし、我々の作業の助けにはならない。もちろん錬金術の記号とヴォイニッチの記号の関係が明らかならば、ルドルフ朝の錬金術師達はこれを解読す

るのは容易く、そして今日までこのミステリーが未解読のままではなかったであろう。

医術マニユスクリプトの中で使われる祈りや呪文は、その多くが編集者やその秘法を使う者にとっての外国語で書かれたものであるという点で興味がある。予想される効果はそれが外国のものであることで、効果は増大する。これら呪文の我々のものと関連するもう一つの特徴としては、その繰り返しがある。1, 2, 3 単語が一行の中で何度も繰り返され、しかも全く同じか僅かしか変わらないものであり、ヴォイニッチの文章中で多く見られる繰り返しが思い出される。最も古い現存する Anglo-Saxon 医術マニユスクリプトにはたくさんのこれら例が載せられている。(Grattan and Singer 1952, Storms 1948 を見よ。)いくつかの呪文はアイルランドの宣教師がもたらした、歪曲された古期アイルランドの祈りである。(例えば"Gonomil orgomil marbumil marbsai ramun...",は「黒い膿疱」に対する呪文である。Grattan and Singer 1952, p. 64)いくつかのものはギリシャの祈祷書が誤って伝えられたものである。(例えば"Stomen calcos. Stomen meta fofu," and "Eulogomen patera cae yo cae agion pneuma...", Grattan and Singer 1952, pp. 49-50)

興味深いことに Anglo-Saxon マニユスクリプトには例えば地母への美しい賛美歌といった古代ギリシャ・ローマの祈りが残っている。"Dea Sancta Tellus, Rerum Naturae Parens...", (Grattan and Singer 1952, pp. 45-46) キリスト教が入ってくる以前の Anglo-Saxon の宗教儀式や信仰が多く認められる。聖人、十二使徒、聖書の文章の断片が呪文として使われた。いくつかの呪文はギリシャ、ヘブライ、ラテン語の単語が混ざり合ったものであり、印象的な音を持つので、患者にとっては心理的に強い影響を与えたことだろう。("Ranmigan adonai eltheos mur O ineffabile Omiginan...sother sother miserere mei deus mini deus mi Amen Alleluiah."は「下痢」に効く呪文である。Grattan and Singer 1952, p. 189)「アブラカダブラ」という単語も Anglo-Saxon 医術にすでに存在し、魔術儀式(majical mumbo-jumbo)の象徴として現代まで伝わった。("ABRACADABRA"という単語は羊皮紙に繰り返し書かれ、患者に使われた。Grattan and Singer 1952, p. 10)

9.4.3 神秘、宗教言語

St. Hildegarde of Bingen (A.D. 1048-1179)が見たヴィジョンについてはすでに簡単にヴォイニッチ手稿との類似関係を調査した。(セクション 3.2.3 を見よ。)そして彼女には「異言を語る」神秘的な能力も与えられていた。Hildegarde の『ignota lingua』の中には一連の「carmina」(歌、賛美歌)が見つかる。彼女は実際、神秘的ヴィジョンを見ている間、その文章を歌い、物語った。Hildegarde の言語には人工アルファベットも含まれていた。文字はそのほとんどが、ラテン文字が変形したものである。Bausani (1970)は同時代人が残したこの用語集から、いくつかのこれら Hildegarde の言語の単語の例を挙げた。多くの場合ドイツ語やラテン語との関係は明らかであり、活用語尾はラテン語の影響を受けていた。図 43 はこのアルファベットと、字訳(transliterate)された単語の例を示している。

Bausani (1970)は他の、Elizabeth von Schönau (Hildegarde と同時代人で、同じく宗教的な生活を送り、そしてしばしば彼女とも連絡を取った。)が使った似た神秘的言語について、そして Christiana von Troud について記述している。後者は習慣的に宗教的法悦状態下で、「喉と胸の間」から旋律的で不可解な単語を発した。イスラムの神秘宗派スーフィ

ーでは「Balaibalan」と呼ばれる高度に複雑な人工言語を発達させ、それにはかなりの文法・統語的規則と、膨大な語彙が含まれていた。Bausani (1970)はこの言語のいくつかの例を挙げている。このタイプの宗教的靈感を得た一人の優れた人間が作り出した人工言語がヴォイニッチ文字の基礎となっている可能性は排除できない。

9.4.4 John Dee のエノク語

Deacon (1968)は Dee と Kelley が「水晶占い」を通して天使から啓示を受けたと主張した秘密の言語について、明白かつ詳細に記述している。彼はさらにとても興味深い Dee と Kelley が 1580 年代初頭に行った「天使との会話」について議論している。(Deacon 1968, pp. 138-156) Casaubon は Elias Ashmole がすでに写し換えた Dee が書いた日記とマニユスクリプトに基づいて、かなり詳細にこれら会話について記している。続く説明はこれら二つの資料からである。私は興味ある読者には強く、Casaubon の作品を手に入れ、そして全てを読むことを勧める。(コピーは議会図書館の Fabyan Collection の中にある。)それは興味深く、そして注目すべきものであり、今の簡単な要約では決して正しく伝えられるものではない。

上(セクション 8.4.4 と 8.9)で見えてきたように、John Dee 自身は彼の水晶玉を使ってヴィジョンを見ることや、天使の声を聞く能力はなかった。これらの役目は全て Kelley に頼っていたが、彼は明らかに精神的に不安定で、^{あくらつ}悪辣な人格の持ち主であった。彼自身が Dee に必要とされるため、または彼に対する決定的な影響力を得るために行った日記の中で報告される不思議な「交信」がどれくらい Kelley よる捏造なのかは未決定事項である。Deacon は、Dee は逆に Kelley を利用し、Dee の占星術や悪魔学活動を隠れ蓑に、二人は英国のために暗号、スパイ活動を行っていたと考えている。いずれにせよ、天使からの交信を受け取り、記録した方法はとても複雑で、全く信じられないくらいだ。Kelley は明らかにしばしばこの努力に短気を起こし、Dee は彼を説得し、続けるように求めた。受ける印象では、Kelley にはほとんど天使との交信に、Dee ほど興味がなく、そしておそらく彼は金を作る作業の方に集中したかったのであろう。

交信の間、(多くはポーランドの都市クラクフの Lasky 伯爵や、プラハのルドルフ宮廷への訪問の間行われた。) Kelley は水晶の前に座り、彼が見たもの、聞いたことを Dee に報告し、彼はそれを書き留め、時々 Kelley を通じて精霊に質問をした。Kelley はしばしば天使自身が、他の人間や生き物と同じく、具体的な場所や舞台の上で動くのを見た。(道を歩く、山を登る、小川を渡る、等々。)彼はそれらの顔、仕草、態度、服装、活動を詳細に鮮やかに記述している。Casaubon はヴィジョンそれ自体を一字一句説明するのと同じくらい詳しく、設定、準備、道具、交信の間の操作について記している。p. 75 からは彼は Dee と Kelley が天使から受け取った暗号行列または暗号「表」について報告している。Kelley はその行列を水晶玉の中の天使が、その列を棒で指示しているのを見た。Kelley は次にそれらを Dee に読み上げ、彼はその行列を後で使うために書き留めた。多くのこのような「表」は天使によって伝えられた。その組み合わせは『Book of Enoch』と呼ばれ、例えば 49 列 × 49 行の表が 49 個からできていた。Dee と Kelley は天使による文章を書き取り、最終的には 26 冊の完全な表が完成した。

表に加えて、天使は長大な単語の語彙を口述し、それにはその単語が使われている文章が続いていて、まさに毎日の基礎言語練習のようである。この過程で Dee は記述した単語や、文の一部分の接辞、構造、類似に関する鋭い質問をしばしば行った。彼はまた正しく聞き取れなかったものやいくつかの理由から質問したことを繰り返すように求め、それを得た。Casaubon は何ページも続けてこの不思議な言語調査をやり直し、その一連のやりとりはまさに、その土地の言語を調べる言語学者と土地の情報提供者の間のものであった。

Deacon (1968)は一連の文章が書き取られた方法について次のように記述している。「Kelley が彼の前に置いたそれぞれの表は大きな四角形からなり、それが 49 × 49 の小さな四角に分割され、それぞれの中にはエノク語アルファベットが書かれている。これらの文字は実際、ランダムな順番である。Kelley は水晶玉の中の天使が表の中のこれら小さな四角のうち一つを指し示したのを見て、(地図を読み上げるように) 4D と叫ぶ。Dee は彼の表の中にこれと関連する文字を探して書き記す。順序を逆にされたエノク語は文章になる。これがでっち上げであると考えすることは非常に困難であり、特に、もしこれをでっち上げるためにはそれを行う人物は 28 の表を暗記したものから選ばなければならない。(pp. 150-151) Casaubon の説明では、個々の単語はひっくり返されて(最後の文字が最初になる。)単語を示し、そして文章や段落の中での単語もユニットとしてひっくり返され、つまり最後の単語は段落の最初の単語として読まれる。図 43, 44, 45 はエノク語のアルファベットと文章の例を示したものである。(ある文字は文章中では見ることはできず、アルファベットとして示されない。そしてその事実の説明をこの資料中どこにも見ることはできない、ということを書いておく。)

Deacon によるとエノク語は独特で、他のカバラの言語や魔術体系と全く異なったものであり、それがどのようにして他の秘密の作品から盗作されたのかを理解するのは難しい。有名な 17 世紀の科学者であり、王立協会の会員であった Robert Hooke はエノク語に対する彼の意見として、それは本質的に暗号であり、スパイ活動の道具であるとした。Deacon はエノク語は真の言語であり、Dee の出版されていない書(例えば *Libri Mysteriorum*, Sloane ms. 3188, British Museum) や Casaubon (1659)の書から困難であるけれども、習得することが可能だと主張する。薔薇十字会の黄金の暁団(Golden Dawn, England 1875)はエノク語を儀式で使用した。読者は自分自身で図 44, 45 に示される一定の意味を持ち、それに付加されるものがあったりなかったりする単語の例を検証するだろう。"OD"は"and"; "CHIS"は"are"; "ICHISGE"は"are not"; "CAUSG(A)"は"the earth"; "CHRISTGOS"は"let there be"等である。ヴォイニッチ手稿との関係が何であるにせよ、この不思議な精霊世界の言語の調査は現代の心理学者、歴史家による注意深い研究に値するものであろう。